# 言葉を忘れた詩人

ヤマダヒフぎ

### この世界は

この世界は一体の死体 たった一つの花を咲かせる為の

この世界は全て偽物 たった一つの本物を作り出すための

この世界は群がる饒舌 たった一つの沈黙を生み出すための

この世界は繁茂する他者 たった一つの自己を作製するための

この世界は何もかも無 たった一つの有が生まれるための 誰も読まない詩を一人、深夜に書き付ける事は虚しい事だろうか?

・・・いやいや、と我が詩人は言う 過去の詩人はみんなそうやって詩を書いてきたのだ 詩はただ自分と向き合い、世界を忘却し、次の場所に行くための道具だった それが後の人にどう思われようと そこに確かに自己と闘った証がある限り 誰一人読まずとも、それは全宇宙に貢献したのだ

> ・・・そんな詩を僕は一人深夜に こうして書いている

### 月の裏側の匂い

風にゆらめく炎
・・・一体、お前は何を思い出したのか?
夢の中の歌詞
「忘れられない」と誰かの言葉

光は夢を見る 唐突に 言葉は矢を射る 突然に 俺は言葉の雪崩の中へと、身を崩し あの日に全てを失う用意をしたはずだった

> 褐色の異国の少女は頬を赤らめ 朝焼けと共に少年に想いを伝える 少年の眼差しは決然とし 未だ 朝焼けの向こうに夢を見ている

サラリーマンとなった俺にどんな夢が許されようか この都市の森、電脳の森に どんな愛が育てられようか 俺は俺を失うことで唐突に跳躍する 俺は月の裏側の匂いを嗅いだただ一人の男だ 彩られた数々の夏 光彩を放つ光の森 夜は幻惑の海で 昼は滅亡の霧

心失った者共が歩く街路俺の心はいつかズタボロ・・・ランボーの影が俺の前を歩く

・・・許された数々の人々 許されなかった数々の人々 皆一様に生の悲哀を 死への欲動に変えて行く

謙遜は豊穣 傲慢は衰亡 乾いた風が俺の肩を撫でていく 亡くなった姉があの世で笑っている

言葉を杖に俺はここまで歩いてきた 何かを失うにはもう慣れたこの頃 俺は滅亡の広野でまた一つの幻影を見る それは俺の姿に形がそっくりだが・・・

その幻影は蜃気楼のように夢と消え 砂漠の広野に俺達のオアシスが建立される 人々が必死に水を飲むその側を 俺は見えない騾馬にまたがり駆ける

人間共と畜生の違いが何だというのだ どちらも飢え、渇き、飲むだけだ 何を飲むかは知った事ではないが 俺の魂はどこに何があるを知っている

魂を求めて魂を失うとは滑稽 それでも人は・・・いや、俺はそうやって 自らの滑稽を笑い続ける道化に他ならない

### 一度、君達の芝居を見てみたいもんだ

この宇宙を壊滅させるぐらいの 派手な喜劇を 俺は君達には喜劇と映ったのを知っているが 俺の魂はいつだって悲劇を演じてきたつもりだ

今、こうして全ての幕が閉じても こうして終演曲(フィナーレ)は続いている・・・

### 言葉を忘れた詩人

眠りよ覚めよ 光は炎の中 静かに舞っているだけだ 魂よ砕けよ そして最後の光芒を我に与えよ

俺には宿命を持たぬ芸術家気取りが ただの馬鹿にしか見えぬ裸眼の持ち主だが ソウルはとっくに失われてしまって 地獄だけが唯一の住処となった

君達は存分に俺を笑うがいい 君達の頼みは集塊の塊性で 君達の自存と自立は おそらく 君達の消滅以外にないのだろう・・・

光よ砕けよ 赤い珠よ 今俺の手の平に真の光芒を残し 世界を一つの残像として 真空圏の彼方へと飛び立て

人類である事を辞めたなら 即ち素敵な月が見えてくる事だろう 俺は詩想を練り忘れて そうやって言葉の全てを忘れた詩人となったのだ

### 宇宙の彷徨

あらゆる宿命が俺の横を通過していく 全ては過ぎ去るものと過ぎ去っていく前のもの この風の前の灯のように 全てが吹き消される一瞬前の緊張状態にある・・・

俺は寝言を言った
それはお前達には金言だが
昔、君達の駄言が
俺の胸を深く抉った事を俺は決して忘れなかった

今、蒼茫の月が揺らぎ 夜の光は一陣の風となる 繁華街では人が人を殴り 俺の中では神が声を荒げる

俺は"絶望"を希求し それ故相対的なあらゆるものに見捨てられた相対性理論だか何だか知らぬがその中心に"絶対"が無ければ理論とは言えぬのは必定

俺は心を砕いて今となる 俺は魂を砕いて今と一つになる その隻眼から世界を眺めれば ガラス球から見た宇宙のように 大きく湾曲している

俺の魂は炎を吐き
地獄の化け物となって貴様らの
砕かれた魂を再生すると共に
貴様らの肉体の全てを焼く
肉体が魂となった輩などは知ったことじゃないが・・・

ああ、誰かこの手に神をくれ 誰も彼もが下らぬ手製の神を持っている現代では 俺の手製の神は薄汚れて輝かぬのだ・・・ この宇宙を一蹴りできる そんな 赤いスニーカーを俺の足にはめてくれ・・・ ああ、今の俺は燃え尽きてゆく恒星だと 俺の魂が囁いている 今、絶対を手に入れた故に消滅する俺の魂は 貴様らの手の内を明るく輝かす そうした一条の太陽となるだろう

そして、その燃えカスに人々が群がろうとも・・・ 俺の消えた魂は その時 まだ発見されていない宇宙を彷徨っているはずだ 手を失ったまま、足だけで 天使の羽が 空の彼方を飛び

俺の肩には 光が舞い落ち

心繋げば 暁笑う

君の涙は 朝焼け洗い

死後を信じる者は 彼らだけ救われず

生に快楽を求める者も 同様に救われず

救いを求めない者だけに 神はそっと手を差し伸べ

暁の向こうに帰っていく あの蝙蝠達が

いつかまた俺の夜を 紅々と照らし

動物達の森で 人々が死ぬ・・・。

魂が洗い流された晩 俺の頬は濡れていた

再びやって来た朝に 俺の魂が感動したのだ

涙はその日の朝食のトーストも しっとりと朝露のように濡らした

# 窓の外の世界はとうに終わっていた それで涙は止まなかったのだ

### 明日の裁き

後悔しているか?お前がお前自身でないことに 知っているか?お前が魂をくり抜かれた存在であることに・・・

> 今、月は揺らぎ 俺の中の光は暁となって 火を放つ 夜はざわめき・・・ 言葉は言魂

テレビはテレビらしくあるだけで全てを破壊し そして インターネットは亡者の住処 だから俺は俺自身の中に跳躍し このような奇蹟を成し遂げた 誰に見られる事もなく 誰に知られる事もなく

今、俺の耳に聴こえる切ないピアノの音は 一体誰がどのような晩に織ったものだろうか・・・ 俺の心のざわめきはとまらない・・・

知っているか?お前はとうの昔にお前自身を失って そして今、それを探し求めている存在だという事を?

> 俺の前ではほんの些細な迷いも・・・ 火を揺らめかす小さな風だから 恋人達がいくら仲睦まじさを 架空の誰かにアピールした所で 俺の火を絶やすことはできないのだ・・・

(ああ、また真実を言ってしまった・・・

誰一人、聴く事のない真実を・・・

俺の耳にだけ響き、人々の耳には永遠に聾唖である事の

そのような真実を)

俺はうぬぼれているのではない 俺はただ俺であるだけだ・・・

### 俺は手の中の火を

もう乾いてしまった火をそっと眺め その中に全宇宙より巨大な真実を見つける そいつは今にも暴れ出しそうな幼獣そっくりで 今もこうやって俺の眼を可哀想に見つめている・・・

小川の上に灯が点り 人々は小さなボートを一艘送り出す 子供達が乗っているそれは、異界へのもの 少年も少女もやがては行くべき所に行かねばならないと かつての大人達は知っていたのだ・・・

俺は俺の他に誰も乗っていない小舟に乗ってここまで来たさあ、ここが終着点ださよなら、お前達は実によく晴れ着が似合っていたよ俺の眼にそれはいつでも喪服に見えたのだが・・・

今夜、ここでこうして別れよう・・・ 今夜、このように銀降る丘の上で 俺の魂はとっくに昇天し埋葬済み 人々の魂は今夜、あの清浄な丘の上に昇っていく おそらく明日の神の裁きをあそこで待ち受けるつもりなのだろう・・・ 神との対話の一時 世界が安らぐほんの一瞬 俺の中の神が羽ばたく

五秒前

二匹のどじょうが相争い

自己の場所を奪い合っている間も

人は融和と殺戮の懸念に余念がない・・・

殺すなら、殺してくれ、と俺は思う

生きなくてはならない、生かさなくてはならないという口振りをしながら

結局、殺すのが人というものだ・・・

あらゆる慈愛に飽いた今、俺は

西欧諸国からアフリカに至る

そこで近代化された土人と

土人化された近代人である俺が話し合い

遂に「死」に対する明確な結論に至る

互いに、生と死を投げ合ってここまで進んできたが

今、それをもう一度拾い集めてジグゾーパズルのように

組み合わせようというのだ・・・

今、不思議とアフリカの陽は輝き

西欧諸国の闇は映える

俺は天空に住む神と会話し

「これでいいか?」と託宣を問うた

神は・・・俺の額を微かに撫でるように

流星群をこの宇宙に降らせて

見えぬ手を俺達に振ったのだった

何願う事なく 俺は眼を閉じた 今や、フィクションとなった俺が 一体、どんな夢を見るのか 俺には興味がある 俺の眼がどんないるはずだ 今、流星が駆けて行き 野の一辺に火が点る その火は瞬く間に広がるが ふいに「自然」によって堰き止められる その時、数ある一等星の内 俺の知っているものだけが輝き出す・・・ そんな風景も俺の魂は 今宵、俺に見せてくれることだろう 笑い、さざめき消えていく 言葉の波と一緒に全てが 笑い、さざめき消えていく 滲んだように消えて行く

> 言葉が波で 君が貝 僕は太陽 外は嵐

笑い、さざめき消えていく ゆくりもなく消えていく 言葉と一緒に透明に 全てが淡く薄れてゆく

明日の方角は右か左か "人"はそんな事をしゃべってる 僕は足元の空き缶を思い切り蹴飛ばし もう一人の僕に会いにゆく

> 笑い、さざめき消えていく 白く、淡く溶けてゆく・・・

### 疲れ果てた心

疲れ果てた心は 何を見つけるのか ドアを開いて足を踏み出せば そこに必ず野があるというのに 疲れ果てた心は 一体どこを彷徨うというのか この電脳の錯雑した道々の上にも もう一つの道が引けるというのに 疲れ果てた心は 一体、どの空を飛んでいるというのか ヒバリがいない今夜でも 月があんな風に飛んでいるというのに

### 世界の希望

明けの中に見える希望を 俺はぼうっと眺めていた この世界はもう何度沈み そしてまた何度上がってきただろう? 昔、大陸のインディアン達は それを知るために早起きしてきたのだった 今、俺はこの人も地理も狭苦しいこの国で 再び新しくなった朝陽を眺める 世界の衰亡と共に上がってくる 俺の希望を見るのと併せて 風の中で俺の炎は 凍っている 世界は卒塔婆の乱立 それとも 巨大な墓地? 古墳の上に古墳を盛って 「今」ができた 世界は壮大な一つの墓場 君の足下にも人骨が埋まっていて 今日も昨日の遺恨を嘆いている 暗い海の中に
一人墜ちてゆく
深い海の中に
一人墜ちてゆく
さいない透明な場所
深海魚達が神聖がって
居場所を空ける場所
そんな所を目指して
僕は一人墜ちていく
もっと暗く、もっと深くと
まるで自らの魂の中に沈み込んでゆくように

白い風の中
ふわりふわりと舞う
青い天空の下
ふわりふわりと舞う
ゆくりもなく行く当てもなく
世界の上を飛んでゆく
ふわりふわりと
と、それは突然僕の鼻先に落ち
僕はそれを慌てて払い
くまなそれを見て少し微笑み
僕の額に優しくキスをした
さて、その上の世界でもやはり
別の物がふわりふわりと舞っていた

### 君の噴飯

世界の共鳴へと繋がる ひとくさりのメロディー 乾いた午後が奏でる 干し草の時間 君は全ての電脳を嫌って 自らの脳内世界に飛び込む そこは観念と観念が溶け合って 幼獣が鎮座している一つの座 その中心に君の手が触れると 君の手は黄金に輝き出す すると天国でラッパが鳴って それは僕の耳元にも届く ところで世界は今赤黒く それは衰亡期の太陽にも似て 遍くものを黒く濡らす 君は自らの曇りガラス越しにその光景を見て 思わず吹き出した

俺の嵐は空を駆け 光となって闇夜を突き抜ける あらゆる物が光るが それは盲目の目にとっては ひとすじの緑色の線としか見えない 俺の心が真っ二つに割れて それを誰が発見したとしても それは唐変木の二つの「石」としか見えないだろう さて、俺はそんな時 監視者共の目をかいくぐり 峠の仙人に会いに行くのだ 白い旗がなびき 黒い旗がなびき 光は君の下へ 君は笑う

世界は凍る 果ての奥で 始まりは終わりを知らせる鐘音 終わりとは君の別名

女神は僕に口づけして 既にこの世を去った ああ、死だけがこの世界では美しい 僕は天空と一緒に取り残されたままだ

## 言葉を忘れた詩人

http://p.booklog.jp/book/61063

著者:ヤマダヒフミ

著者プロフィール:<u>http://p.booklog.jp/users/yamadahifumi/profile</u>

感想はこちらのコメントへ http://p.booklog.jp/book/61063

ブクログ本棚へ入れる http://booklog.jp/item/3/61063

電子書籍プラットフォーム:ブクログのパブー (<a href="http://p.booklog.jp/">http://p.booklog.jp/</a>)

運営会社:株式会社ブクログ